

令和8年

8月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

（畜産）東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0897) 57-9122

【熱中症対策】

～予防のポイント～

高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業するとともに、できるだけ単独作業は避けましょう。また、喉の渇きを感じる前にこまめに水分・塩分補給し、熱中症対策アイテムを活用しましょう。

～熱中症が疑われる場合～

涼しい環境へ避難し、水分・塩分を補給してください。応急処置をしても症状が改善しない場合は医療機関で診療を受けましょう。

【作物】

1 品種・田植期別の穂肥施用時期（出穂期・成熟期は目安）

品種名	田植期	穂肥(出穂 20 日前) 化成 444 又は NK 特 11 号	施用量 (10a)	出穂期	成熟期
ヒノヒカリ	6/15	8/1 頃	30kg	8/25 頃	10/5 頃
にこまる	6/15	8/10 頃	30kg	8/29 頃	10/12 頃
ひめの凜	6/15	8/8 頃	30kg	8/27 頃	10/5 頃
きぬむすめ	6/15	7/28 頃	30kg	8/16 頃	9/23 頃

2 水管理について

- 中干し直後：2～3 回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期（出穂 25 日前）～穂ばらみ期：土壤水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3 cm）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期：灌水して土壤に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
- 落花期：落花期は収穫前 7 日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壤水分を保ちます。

3 病害虫防除について

防除時期	病害虫名	農薬名 散布濃度・使用量 使用時期
8 月中旬 ～8 月下旬 (出穂期前)	カメムシ類・ツマグロ ヨコバイ・コブノメイ ガ・ニカメイチュウ・ イネツトムシ・ウンカ 類・紋枯病・もみ枯細 菌病・いもち病	スタークル顆粒水溶剤 (2,000 倍 収穫 7 日前まで) ＋ パダン SG 水溶剤 (1,500 倍 収穫 21 日前まで) ＋ ダブルカットバリダ FL (1,000 倍 穂揃期まで) (粉剤の場合：ワイドナーエス粉剤 DL 3～4kg/10a、収穫 14 日前まで)
8 月下旬～ (穂揃期 ～傾穂期)	カメムシ類 (ウンカ類、ツマグロ ヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 (2,000 倍 収穫 7 日前まで)

- ・稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性があります。出穂 20～15 日前にドイツボルドー A2,000 倍（出穂 10 日前まで）を予防散布してください。他剤との混用はできません。
- ・カメムシ対策として、ほ場周辺の草刈りを行ってください。出穂 3 週間前と出穂時の 2 回実施すると効果的です。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂 10～15 日後に防除を実施してください。

<松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

8 月は、子芋の肥大、孫芋の着生、その後成熟期を迎えるため感染しやすく、台風の襲来等による長時間の降雨により発生が拡大します。

台風、長雨後は、「ダイナモ顆粒水和剤:2,000 倍」を散布し、降雨が続く場合は「ピシロックフロアブル:1,000 倍」を散布【**耐性菌対策**】してください。

さといもは散布薬剤が付着しにくいいため、スカッシュ 2,000 倍もしくは、まくぴか 10,000 倍を加用してください。また、薬害を軽減するため、土壤水分や生育状況を観察し、灌水後夕方防除してください。

農薬名	病害名	散布濃度	収穫前日数 /使用回数	特 徴
ダイナモ 顆粒水和剤	疫病	2,000 倍	収穫 21 日前まで /3 回以内	予防及び治療効果がある 感染直後でも、病気の蔓延を阻止。 高温多湿時薬害を生じる場合がある。
ピシロック フロアブル	疫病	1,000 倍	収穫前日まで /3 回以内	予防効果主体であるが、病害進展抑制 効果が強い。 収穫前日まで使用できる。

イ ハダニ類

発生初期にコロマイト乳剤 1,000 倍（収穫前日まで/2 回以内）、マイトコーネフロアブル 1,000 倍（収穫 3 日前まで/1 回）で防除してください。

ウ ハスモンヨトウ

8 月は多発するため、発生初期にグレーシア乳剤 2,000 倍（収穫 7 日前まで/2 回以内）、またはフェニックス顆粒水和剤 2,000～4,000 倍（収穫前日まで/2 回以内）で防除してください。

(2) 水管理と追肥

ア 全期マルチ栽培は、晴天が続く場合、畝間の土の状態や生育状況をよく観察して灌水してください。

イ 日中、溝に水が溜まったままの状態では、水の温度が上がり根傷みの原因となりますので、夕方の灌水に努め、日中には停滞水が残らないよう注意してください。

ウ 露地栽培（化成体系）は、8 月上旬及び中下旬に「化成 4 4 4」を 40 kg/10a 施用してください。

<徳永>

2 やまのいも

(1) 追肥と水管理

一般体系では 8 月上旬に、MB 粒状固形を 80 kg/10 a 施用します。この最終追肥が遅れると、芋の形状の乱れが心配されるので注意してください。

開花後、栄養生長（茎葉繁茂期）から生殖生長（新芋肥大期）に移行し、吸肥力も 8 月上旬～9 月にかけて最大となります。土壤水分のムラ（乾湿の差）をなくすため、生育後半まで定期的な灌水を行い適湿を保つようにします。

(2) 病害虫防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	散布濃度	収穫前日数/使用回数
7 月下旬～ 8 月上旬	ハダニ類	コロマイト乳剤	1,000 倍	7 日前まで/2 回以内
	炭そ病	ベンコゼブ水和剤	600 倍	21 日前まで/4 回以内
	ハスモンヨトウ、 ガ・イモガ	プレバツソフロアブル 5	2,000 倍	前日まで/3 回以内
8 月中～ 下旬	ハダニ類	マイトコーネフロアブル	1,000 倍	3 日前まで/1 回
	ガ・イモガ	アタゴロン乳剤	2,000 倍	7 日前まで/3 回以内
	炭そ病	ベンコゼブ水和剤	600 倍	21 日前まで/4 回以内

※台風、雷雨の後は、アミスター 20フロアブル 2,000 倍（収穫前日まで/3 回以内）で防除してください。

<三谷>

【果 樹】

1 摘果

着果量に応じた摘果を行い、目標とする大きさの高品質な果実の生産と来年の着花確保を図ります。

(1) 温州みかん

着果量が多く樹勢低下が心配される樹は、先月に全摘果を行った樹冠上部以外の着果部の摘果を始めてください。

着果と新梢発生のバランスがよい樹は、9 月以降に重点を置いた後期摘果を行い、着果ストレスによる果実品質の向上に努めます。

樹冠上部を摘果して夏芽を発生させた樹は、エカキムシ（ミカンハモグリガ）の防除を徹底して、健全な結果母枝を確保します。

(2) 中晩柑類

着果量の多い樹は、早急に摘果を行い樹勢維持と果実肥大の促進に努めてください。仕上げ摘果は、8 月上旬頃までに完了してください。

2 灌水

土壤の過乾燥は、果実の生育阻害（小玉果、酸高果実）や樹勢低下を助長するので、適切に灌水を行います。

温州みかんは、葉の巻き具合（葉の萎凋が朝になっても戻らない）、旧葉の落葉状況等を見ながら、7 日間隔で 10～20 mm（10～20 t/10 a）を目安に灌水して、適度な水分ストレスを維持します。

中晩柑類は、高温、土壤乾燥が続けば 7 日間隔で 20～30 mm（20～30 t/10a）を目安に灌水を行ってください。

3 病害虫防除

黒点病防除は、前回散布後の累積降水量 200～250 mm または 30 日の間隔で定期的に薬剤散布してください。本病に弱い品種（せとか、清見等）は、散布間隔を短くします。また、伝染源となる枯れ枝は除去してください。

<三谷>

【シキミ】

1 病害虫防除

高温期に多発する病害虫の適期防除を徹底し、お彼岸出荷に備えます。防除は高温時を避けて涼しい時間帯に実施し、薬剤が葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。

対象病害虫名	農薬名	散布濃度	使用時期/使用回数
クスアナアキゾウムシ	コテツフロアブル	2,000 倍	発生初期/2 回以内
グンバイムシ類	モスピラン顆粒水溶剤	2,000 倍	発生初期/5 回以内
サビダニ類	ピラニカ EW	1,000 倍	発生初期/2 回以内
ケムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2,000 倍	発生初期/5 回以内
うどんこ病、炭疽病、輪紋葉枯病	トップジン M 水和剤	1,000 倍	発病初期/5 回以内

2 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり、防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くしてください。

3 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除き、出荷先の規格に合わせて輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で 10 時間以上水揚げをしてください。

<浜田>

【畜 産】

（ハエ対策）

ハエの発生は、6 月から 7 月にかけてピークを迎え、8 月にはやや減少しますが、秋口に再び増加する傾向があります。ハエは通常、卵から成虫になるまでに約 2 週間を要しますが、気温が高い環境下ではその期間が短縮され、約 1 週間で成虫になります。成虫の寿命は 1～2 ヶ月で、その間に 1 回あたり 50 個から 150 個の卵を 5 回から 10 回にわたって産卵します。ハエ対策としては、主に以下の二つの方法が効果的とされています。

1. 環境対策	・こまめな除ふん、清掃、残餌の除去 ・畜舎内の換気を良好に保ち、水漏れ箇所の修理などによって乾燥状態を維持する ・ふん尿を発酵・乾燥させることでウジを死滅させる（発酵温度 60℃以上とする）
2. 薬剤による殺虫	卵・幼虫対策 ・糞や堆肥など、ウジが発生しやすい場所に脱皮阻害剤（IGR 剤など）を散布 成虫対策 ・ハエ取り紙、成虫用殺虫剤の使用（休業期間注意） ・食毒系薬剤と誘引剤（砂糖、酒など）を混合し、ハエが好んで止まる場所（天井、壁など）に設置

<真鍋>